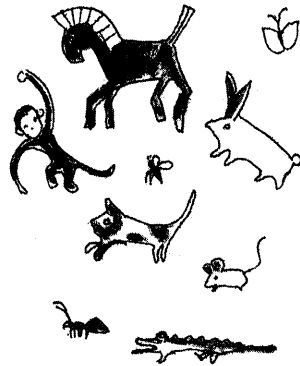


## 音楽

松井 とし



近年、私が出会う子どもたちの心に、変化が生じてきている。いつも不安でいっぱいの子ども。指示されたことはきちんとするが自分で判断したり、創り出したりしなければならぬ事は避けようとする子ども。そして何より、子どもの本分であろう遊びを知らない子どもらである。

小さな体に、さまざまな困難を背負って入園してくる子どもたち。彼らを迎えるわたしたちに出来ることは何であろうか。ズシリと重い課題を受けとめ始めた時、音楽は私の中で、さらに大きな位置を占めるようになった。

音楽を聞いていて、思わず体が動いてしまう子どもたちの素直な反応を、もっと引き出そう。評価を気にせずに『自分の内から沸き出るものを感じて表現する。』このことは、

私が子どもたちに強く願うこととなった。音楽に合わせて手拍子を打ったり、踊ったり、生き生きと反応する彼等を見ると、音楽を取りこむことの意味が見えてくる。

リズムカルに動く手に楽器を持てば、たちまちミニコンサートのはじまり。レコードから流れる音楽を共有して演奏する時、何とも言えない家族的な温かさが室内に満ち溢れる。

『静かにきく』から『音楽に反応しながら聴く』へ。この発想の転換は、私自身の音楽との付き合い方をも変えた。

いわゆる音楽的な環境に恵まれ、幼い頃からピアノに親しんできた私にとって、音楽は好きではあったが、それ以上に課題であった。もはや、以前のように指は動かなくなってしまうが、今の私はあの頃よりもっと音楽を愛し、音楽と共に生きることの楽しさを実感している。

子どもは本来良い耳を持っていて、和音構成の複雑な歌、難しい伴奏のついた曲を好んで歌う。腫を輝かせて歌う子どもたちと共に在る時、しみじみピアノが弾けることを感謝し、心から楽しんでピアノを弾くのである。

(神奈川県立教育センター)